

環境産業考古学の新展開と旧東独産業遺産の消失 —第14回TICCIHフライベルグ会議参加印象記—

山田 大隆 (酪農学園大学)

1. はじめに

□会議の歴史的概括と筆者の参加動機

1972年のアイアンブリッジ大会から37年目、2009年夏、TICCIH(国際産業遺産保存会議)第14回フライベルグ大会(2009年8月30日~2009年9月5日)に参加した。今回のテーマは「産業遺産—エコロジーと経済学」で、主催はTICCIHドイツ委員会、会場は明治初期ライマンや日本の鉱山技術者留学で世界的に有名な鉱山古都市フライベルグ市(人口4.3万人)工科大学であった。

今日の国際産業遺産保存運動は、今回のこの会議のテーマに見られるように、産業遺産と環境問題が中心で、環境産業考古学としての学会ツアーが旧東独時代の産業開発と乱開発後の環境保護企画地見学で、世界不況下での遺産保存のための財政問題、つまり継承の実務問題が近年問題となっていることが今会議で確認された。サロンの机上研究ではなく現実的で実務的な意義を持つ産業考古学研究と応用方法論への改革意義を考える筆者には、今回の国際会議参加は大変有意義なものになった。今回の会議は、ドイツに於いては、1975年のボッフム大会以来34年ぶりの開催で、会場はこの世界の歴史的銀鉱山都市のフライベルグ工科大学(旧ベルク・アカデミー)であった。

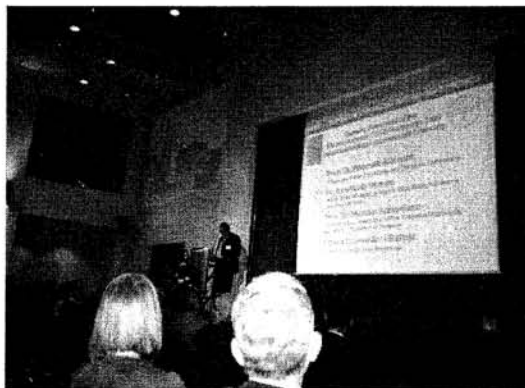


写真1 会場風景

恒例の学会ツアーは今会議では2日間(2、4日目)あり、2日目(9月1日)に旧東独の産業開発地(露天掘産業遺産地他)、4日目(9月4日)に旧繊維工業都市ケムニッツ市(1989年の統合前ではカールマルクスシュタット市)で行なわれた。会議の事前、事後ツアーは各3日間あり、それらはルール地方エムシャーパーク、ベルリン建築史、チェコ産業史、ポーランド工業史、サクソン工業史跡を訪ねる旅であり、講演、発表、WS、学会旅行、夜のアトラクションと内容も充実した、産業考古学研究で世界先進国のドイツらしい国際会議で印象的だった。

2. 大会の概要

□会議の結果

参加国は39カ国363人、発表数は4日間で208件。日本人参加者18名、発表数6件でこれも史上最多であった。参加国は地元ドイツが113名、イタリアが20名について日本から18名で3位、以下イギリスが17名、アメリカが17名、スペイン14名、ブラジル13名、フランス12名、チェコ10名、ギリシャ9名、カナダ9名、スウェーデン9名、デンマーク8名が参加上位国であった。これまで、ヨーロッパ・クラブと呼ばれたこの会議は、今回の総会9月5日で、会長を10年務めこの組織の世界普及に貢献した前会長E.カサネルズ氏(スペイン・カタルニア産業博物館長)からアメリカ産業考古学会SIAの指導者のP.マーチン教授(ミシガン工科大学社会学部、この大学はSIAの事務局大学)に新会長が移ったことで国際化の新局面を迎えた。

今回の大会の特徴は、この会長交替以外に、北

欧圏の4ヶ国、旧東欧諸国、中南米、アジアではインド、インドネシア、日本、台湾の参加が増えたこと、ブラジル（最初、次期開催国の下馬評があった）の積極的な発言や、アジアで結成された日本-インドネシア建築家集団 mAAN やインドのグループ BHOPAL の WS への積極的な企画提案や情報発信が目立ったことである。

また、これまで30年間、機械、土木、電気、交通、鉱山他でのバランスのとれた研究発表を一貫して行ってきた日本産業考古学会の実績を揺るがしかねない現況があり、今回の日本人参加者からは、種田教授提案による、正式の TICCIH 日本組織（日本委員会）の早期設立の必要性が強く語られた会議でもあった。

研究発表者ともに、地元ドイツのシェアは大きく、工科大学生を大量動員しての大会運営は、計画性と実行性で勝れたドイツらしい組織的なもので、この大会の成功に基本的に貢献していた。ただ残念ながら、発表に関する議事進行や運営の側面では、地元ドイツを最優先する傾向が見られたことや、海外からの参加者に対する疎外的な一面などの問題点も多少散見された。

□開催都市の概要

フライベルグ市は、終戦直前の徹底爆撃崩壊とその後の都市復興、エルベ川河畔のフラウエン教会、レジデンツ他の世界遺産認定で有名なドレスデン市からはニュルンベルグ行きで、DB で普通便40分、特急で25分の至近地(45km)にあり、次のケムニッツ、ツピッカウと等距離にある。

1945年2月のドレスデン爆撃の折りにも爆撃されたが、復興し旧中世都市景観を再現している観光部分は駅から徒歩20分ほどのリンク内旧市街で、他にリンク外の周辺の住宅地からなる。この町を世界的に有名にした中世からの銀鉱山は、リンク傍に旧鉱山があり、エリザベス坑と呼ばれ、中世から800年続く、この鉱山都市の象徴でもある。

さらに徒歩30分の所に新鉱山があるが、これ

は1986年閉山の国立鉱山で、立て坑建物を残し解体され、立て坑周辺に屋外鉱山機械展示、立て坑建物内に鉱山史パネルがある。立て坑櫓は稼働しており、ケージで170m下るアンダーグラウンドツアーが予約で体験出来る。

また、歴史上有名なベルクアカデミー時代に使用されていた中世鉱山施設の貴重な教育用模型50点が展示され見学出来るが、残った付属建物はガーデンパーティ会場に転用されている。旧市街の中心を鉱夫像と大学都市フライベルグの宣伝看板があるメイン通りが貫通し、その周辺にマルクトプラス、ラートハウス、市博物館、フロイデンスユタイン城の名のあるシュロス、土地名物食事シュニッツェルと美味好評のフライベルグバーガーを出すレストラン、大小の教会が配置され、同じ大学都市で同規模のゲッチングェンに似た、裕福な歴史的大学観光都市としての風格と景観を誇っている。市唯一の中央郵便局はリンク傍メイン通り外れにあり、資料の郵送を求める学会旅行者にとっては利用しやすい便利な都市である。

□学会の会場と資料のありか

学会会場は、市の中心地区から各徒歩10分以上かかる、ペーター通り校舎、アカデミー通り校舎、ブラウハウス通り鉱物学部アブラハム・ゴットロープ・ウエルナー校舎の3会場に分散し、必ずしも便利ではなかった。

歓迎式はシュロス、開会式と総会はアルテメンザ講堂、ポスター、WSのメイン行事はペーター通り校舎、本部と登録はアカデミー通り校舎、研究発表は3校舎、映画会はシュロスとペーター、閉会式は新銀鉱山野外レストランで行なわれた。

リンク内市街までフライベルグDB駅から徒歩5分、さらに各校舎まで徒歩20分で可能である。地図上で学会会場の周辺の地理を頭に入れて行動すると比較的徒歩移動は容易であった。

資料入手関係では、大学博物館（鉱物学）と鉱山史資料販売がシュロス内鉱物博物館ミュージアムショップ、この都市の著名な銀鉱山史展示は

シュロス近くのドーム（大聖堂）向かいの市博物館内、および屋外展示の旧新銀鉱山内外にある。

3. 大会の各内容

(1) 開会式 (8月30日)

会議参加登録後の夕方 18 時から市中心施設のシュロスで行なわれ、市長、実行委員長である工科大教育学部アルブレヒト教授、現会長のカサネルズ氏の挨拶の後、豊かな鉱山都市特有の民族衣裳でのコーラス、楽団演奏がなされ、独特で高質の中世近代の鉱山伝統文化行事が披露された。イベント後の歓迎パーティーでは、日本人参加者内や海外の研究者との旧交が暖められた。

開会式に先立ち 13 時からの会議登録では、参加者の多い大型国際会議にしては、運営側に不備が多く諸々の混乱が見られた。地方小規模工科大の学会事務作業に不慣れの学生が中心で運営を行うことの問題点ではと思われた。

これは予測される状況ではあったが、混乱は参加者名簿に発表者や参加者の日本人名がなく、宿泊先も市内から遥か遠方で、バス便がない等があった。

今回、筆者は、国際学会への正式登録でメール登録と登録料銀行送金を平行完了し、宿泊はキャパの小さいこの町を避け隣町の大観光都市ドレスデン市（人口 50 万人）に連泊した。国際会議ベテラン参加者で有名な TICCIH 事務局長の S. スミス氏もドレスデンでの連泊組であった。

逆にその配慮に感心したこととしては、登録時に提供されたビニール製蓋付きバッグが、最初は国際会議用としては体裁が悪く不細工に見えたが、機能的にはドイツ特有の間断ある降雨には非常に有効であったことである。

(2) 基調講演

第 1 日目 (8月31日)

ペーター通り校舎アルテメンザ講堂で開かれた公式開会式では、市長、ザクセン州知事、実行委員長、現会長が挨拶をし、会議を準備し急逝したメンデ氏追悼会の後、招待講演会があった。

長老の元ロンドン科学博物館長の N. コッソングと元ポッフム・ドイツ国立鉱山博物館長の R. スロッタの両氏から、それぞれ産業考古学の今日的課題、ドイツ産業考古学研究 34 年懐古に関する講話があった。

続く基調講演は、地元中心フェール、テファー、グルーベ、デトマーの 4 氏で、産業遺産保存の経済問題、環境と考古学のランドスケープ（保存なくば未来の景観学はテレビ画面か）等の話題提供があり、内容は刺激的で斬新であった。各講演は内容が濃いもので、非英語圏参加者には、ポケット録音機の携帯が必要かと思われた（その携帯は海外学会への参加経験が豊富な愛知県立豊橋工業高等学校の石田正治氏が推薦している）。

(3) 研究発表

1 件 30 分で、1 日目 8 月 31 日、3 日目 9 月 2 日、4 日目 9 月 3 日、6 日目 9 月 5 日、の計 4 日間あり、総計 208 件の発表があった。通常の国際会議ではシンポ、WS が多いが、今回は WS 数件、シンポはなしで個人発表が中心であった。

会期 6 日間で 2 日間のツアー以外は徹底した個人発表が中心で、国際交流学術の学会らしさがあった。地元工科大の発表が多く目立ち、各国の豊富な遺産保存の事例の紹介は貴重であった。各国 10 年の産業遺産研究史を紹介するナショナル・ペーパーをまとめた本の配布も新しく、時宜に合った企画を適切に展開しているように思われた。

下記に 5 名の日本人発表者名とテーマを記載する。ちなみに、英語での発表時間はポスターを除き、1 件 30 分であった。

第 2 日目 (8月31日)

① 岡田昌彰氏 (近畿大学土木環境工学科)

「歴史的塔建造物の景観についての歴史的評価」

第 4 日目 (9月2日)

② 寺沢安正氏 (中部産業遺産研究会)

「日本アルプス山麓の宮代水力発電所遺産」

③ 栗野宏氏 (山形大学工学部機能高分子工学科)

「最近 50 年間の日本山岳を超えるルートの

歴史—歴史と遺産」

第5日目 (9月3日)

④ 堤一郎氏 (日本労働研究機構研究所)

「日本における鉄道遺産認定システムの史的概括とJR東日本での0系動力分割新幹線の新規認定(2008)」。この発表は当初、青木栄一氏(元東京学芸大学)の予定だったが、体調不良学会不参加のため、堤氏の代行となったものである。

第7日目 (9月5日)

⑤ 若村国夫氏 (岡山理科大学理学部)

「日本、ドイツ、オランダでの歴史的石積みドライドックの国際比較」(ポスター発表)

⑥ 森田優己氏 (桜花学園大学人文学部観光文化学科)、森田信二氏 (名城大学経営学部)

「観光振興が世界産業遺産に及ぼす諸影響」

(4) 学会ツアー (9月1日と9月4日)

IBA 企画のコトブス市近くの SEE 主宰の産業景観ツアー、旧繊維工業都市ケムニッツ市の産業遺産産業博物館見学と建築遺産ツアーであった。各ツアーはユニークな情報も多く、国際会議ならではの有益なものだった。

□景観ツアー (9月1日)

「領主ピクラー王国ツアー」と洒落たツアー名の旧東独ルザチア地方(ブラウンシュバイク市南部)の1日バス産業観光で、見所は広域で多くあり、翌日の9月2日には残りの非公式ツアーが募集され実施された。

ちなみに、主宰の IBA は 1989 年以来世界的に有名となった旧ルール鉱工業地帯の広域野外博物館再編事業エムシャー・パークを主宰する IBA ではなく、東独 IBA である。旧東独ブラウンコール露天採炭跡整備の景観遺産企画 SEE (NPO) の立ち上げ以来、中心として活動している SEE 会員の参加と運営の発信と熱心さが目立った。今回はまた、多数の SEE 出版物が公表配布された。

① 最初に、エルスターベルダ市とラオホハンマー市の間にあるプレッサの 1927 年建設給

レンガ造りのプレッサ石炭火力発電所(初期出力 1 万 kW) を訪問した。この施設は 1989 年統合以降急速に衰退し、1985 年から 3.4 万 kW に出力増加されていたが、技術の遅れで 1992 年に閉所となった。ヨーロッパ最初のブラウンコール専用火力発電所で、1930 年代標準技術継続保存例として 1998 年に全面保存され、遺産認定化し公開された。

東独 IBA の活動拠点のこの場所は NPO 事務所になっているが、今回も最初の歓迎式、最後の夕食パーティーもここで開催された。燃料石炭運搬用として近くを DB が通り、ドレスデンからもローカル便で訪問出来る。東西地区経済格差と現代技術革新に残念ながら追随出来なかった旧式発電所で、1000 人近い雇用も失われた。内部は、燃料倉庫、石炭貨車荷降建物、バルコン、石炭ボイラー室(3基)、最初の蒸気タービンと 1 万 kW 発電機、制御室が見学出来る。

② 次いで、隣の東独時代露天掘り荒廃サイトを見せるグロスレッシュェン地区のランドマーク観光のビジターセンター IBA テラスへ行く。ここからは、巨大なドラッグライン(エクスカベーター、地盤浚渫機械、有名な世界最大の露天掘マシン)での採掘跡地が見える。マシン付属の巨大な回転式バケットで削った表土壁は崩れ、表土を剥がした跡のブラウンコール炭層(褐炭、ドイツで最も埋蔵量の多い原料炭。ドイツ戦後出炭量 4.5 億トン年産の主要石炭)の露天掘地区だが、各地区で盆地となった底の炭層採掘跡には流出河川がないので必然的に大量の雨水が溜り、ここから北へコトブス市まで 20 近い湖沼群になっている。いわば日本での足尾銅山鉱毒処理地、谷中村遊水地のドイツ版である。環境で見ると広大な自然破壊景観(凄まじい自然破壊地)なのだが、不思議と自然の広大さと人間産業活動の巨大さを実感出来る新景観遺産となっている。旧東独は戦後ソ連指示で石炭動力に

よる大産業振興を実施し、その排ガスでの酸性雨問題と膨大な石炭採掘での広大な露天掘跡地を残して 20 年前に消滅したが、その広大な自然破壊跡地（負の遺産）は現在新しい景観遺産、産業観光地となっているのである。

このビジターセンターでは、その景観産業観光 SEE 活動の全貌（観光パンフと遺産ロードマップ）と露天掘技術全貌が専門書で知ることができる。ドイツ巨大露天掘技術は、現在のような環境保全を重視しない当時の東独の政治下で、第二次大戦時開発の列車砲（クルップのグスタフ、ドーラ、ベルタ等の総重量 4000 トンを超える口径 40~80cm の要塞攻撃砲）技術を応用発展させ、このレール上可動の世界最大可動機械であるマンモス・ドラッグライン・マシン（最大長さ 500m、重量 1.3 万トン、使用電力 2.3 万 kW）を作ったのである。その活動地がまさにここである。予想以上のドイツ機械技術の凄さを感じ、その稼働での自然破壊の凄まじい現場にさらに驚嘆したものであった。

現在、筆者は大学の教職課程の環境学を講義、北海道炭鉱史（坑内掘技術史）を研究しているが、露天掘り技術関連資料と情報入手は、今回の学会参加での最大の成果であった。

- ③ さらに、隣接のラオホハンマー地区のバイオタワー遺産群を視察した。これは泥炭状の草を発酵させ、最終的にはドイツの厳しい冬対策の各家庭用練炭燃料を作る、燃料製造用工場用の 24 本の発酵用（草分解させ炭素分取出して草原原料作成）タンク群だが、平野に忽然と赤い異様なレンガタワー群が突然出現するのには驚かされる。各タワーは 3~4 本が束になって直立している。

これらは全レンガ製で高さは 23m ある。塔上まで 92 段の階段で登れ、1 塔の頂上には全面ガラス張りの張り出し展望室がある。旧現役写真では他に多くの流動化した草原原料輸送用のパイプ類が地面に見える。バイオ原燃料作成用プールも横に残されている。20 年前 1989

年の東西統合では旧式技術で、練炭暖房は現在の西独では使用されず、急速に衰退し、施設は閉鎖され雇用も失われた。解体中に発酵塔は美術的な観点から興味を持たれ、美術建築重視 IBA の評価となり、全本数が残され SEE 産業観光資源となった。

しかし、遺産としての形骸は残されたが、残念ながら壊し過ぎてシステムの全体像である本来の工業的機能が理解不能となった。産業美術モニュメントであるエムシャー・パークにも同様の傾向があるが、産業考古学的にはこうした観点から遺産としての価値を認め、存続させるためには基本的問題があると考ええる。

- ④ 最後に、リヒターフェルド地区で、②での機械遺産ブラウンコール露天掘り用の保存された世界最大可動機械ドラッグライン・マシン F60（旧東独ラオホハンマー市のタクラーフ社製で、60 は剥ぎとれる表土厚さ 60m の意味する）を見学した。登録時配布のガイドテキストより要約する。



写真 2 ドラッグライン・マシン F60 の全景

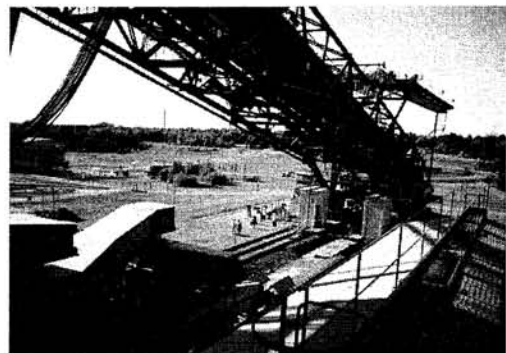


写真 3 F60 の見学

旧東独は、1958年に産業上重要なブラウンコール露天掘り採炭の能率を上げるために、「標準型コンベヤーブリッジ」と称する、コンベヤーブリッジを制作し始めた。最初のこの型はF34（表土厚さ34m対応）で、45、60mと進化した。F60型は5台作成された表土掘削コンベヤーブリッジで、最初の3台は使用中、4台目は現代的改修で2010年再可動、5台目のこれがこの展示品である。全機械はベルツオウ南部のルザティアン露天掘坑で使用された。このF60は1988年に3年かかって建造された。

クレットビッツ北部の露天掘り炭鉱でのこの機械の組み立てに1000人以上の工員が雇用された。F60は1991年3月に完成したが、完全可動にはさらに13ヶ月を要した。それでも短期間にF60は270万トン以上の表土を排除した。

「ラウジツアーウント中部ドイツ鉱山会社LMBV」は使用継続を図ったが可動せず、1997年にルザティア地方の産業記念物としての保存が決定した。1998年にF60はスクラップを免れ、1999年にIBA企画（フェールスト・ピュックラーランド）の所有となった。2002年からIBAの企画として一般公開されている。

F60はその大きさから他の傑作技術と比較され、「ルザティアの伏したエッフェル塔」のニックネームもある。F60は長さ502m（エッフェル塔は324m、7500トン）、幅240m（レール駆動部）、高さ80mである。重量は完全装備で13600トン、オイル、部分品除去後には11000トンになる。東西統合以後の東独のブラウンコール産業の衰退により、この産業の加工品（工業製品）としての保存は主な重要事となっており、人々は重要問題に直面している。それは、F60の大きさが鋼鉄構造物として巨大で保存状態は露天であるため、ユニークな産業記念物保存としての保存と修理に莫大な経費がかかるからである。

しかし、F60の文化的経験との結合で「ビクターマイン（これが鉱山）」としての使用法は、ドイツにおけるブラウンコール炭鉱保存の重要記

念物での保存のみならず、産業遺産と技術史への一般人の興味を保障しうるものである、としている。（以上翻訳）

さらに機械を詳述すると、1988年製のこの機械はトラスブリッジ長（採掘する表土の最大横幅）が500m以上あり（エッフェル塔より長い、というパンフ強調文）、この先に表土剥ぎの巨大回転式バケットが着く（失われている、地上に1ヶ展示）。総重量は1.3万トンで2.3万kWの電力（中級発電所1基分）で稼働する。ブリッジの手前側と先端側に付いた両バケットセットで、1時間に2.9万平米の表土を除去する能力がある。

レール幅1mで2列の線路上でブリッジと直角方向に表土を削りながら全体が動く。この1.3万トンの鋼鉄構造物の1時間の移動量は15mだが、その動くビルとも言える現役時代の威容は想像に難くない。

現役時代にはより小型機が27基あり、ともに東独の石炭巨大生産を担ったが、90年代の経済問題（ドイツはルール坑内掘りでの国際炭価4倍化を是正するため、この露天式に転換したが、90年代のオーストラリア炭他の世界の低労働単価の露天掘り発展での競争に敗退した）で廃止、F60を残し殆どが爆破解体された。

このマシンで剥いだ表土下の実際の炭層掘削はより小型（幅100m、回転式バケット付き）のドラッグマシンが掘削し、後続の石炭貨車にベルト給炭する組合せである。

F60機械の内部見学では、全員ヘルメットを被り、元技術者ボランティアの付き添いで学生の30分の英語ガイドツアーを聞いた。ドイツ産業遺産保存地では説明はドイツ語ガイドツアーが多く聞き取りは難しいので、これは好都合であった。

機械横にはビジターセンターがあり、食堂があり、機械の写真集が販売され、実働の時代と解体時の記録映像が上映されていた。ドイツの炭鉱露天掘り技術と巨大掘削機械は世界的に有名で、ここに来て初めて機械と現場を認識した貴重な体験であった。この機械の詳細と発達史、使用方法

(露天掘り技術)の歴史解説内容は、先の「I B Aテラス」で購入入手可能な資料である。

なお、このインパクトある人類の産んだ史上最大機械の前面で2003年から毎週末エムシャー・パーク定番の独特のナイト・イベント(ベルリンの芸術家H.クーンが出演する光と音のショー等)が常時開かれ、機械技術と人間文化の調和を考える場になっており、ドイツ国内外からの多数の観光客の集客に成功している。

□産業遺産ツアー (9月4日)

ケムニッツ市産業遺産視察

ケムニッツ市(現人口24.5万人)はサクソン地方の中心都市で、1143年からの歴史を持つ古都である。終戦まではこの名で、戦後の東独時代44年間はカールマルクスシュタット(市庁舎前にマルクスのブロンズ製頭部が市の象徴として現存)と改名された。1989年の東西統合以来は元のケムニッツ名に戻っている。東独時代は第3位の都市であった。戦前から、繊維工業、機械工業中心の工業都市として栄えた。1799年の最初の英式紡績工場建設以来、イタリア経由の原綿利用で発展し、19世紀から20世紀にかけてサクソンのマンチェスターと言われ、繊維機械自体の製造、フライベルグ他の鉾山機械製造の他、第二次大戦ではIMC(ケムニッツ工業博物館)の元の工場では傑作パンツァー戦車のマイバッハエンジンの製造と組み立ても行なった。市内各所にその栄光を示す工場建物群が多少残っているが、東西統合以後の経済格差は大きく、経済疲弊し旧工場は消失、肝心の機械産業史遺産は市のリニューアル化でほとんど残っていない(日本の炭鉾は閉山後、負債補填に産業遺産を徹底売却するのに似る)。僅かにサクソン・ケムニッツ工業博物館IMCの内展示品遺産にこの都市の工業史を見ることが出来るのみである。したがって、この日のツアーは経済問題下では産業遺産保存も難しい(建築遺産保存程度)という、今回の会議のテーマを証明したようなツアーであった。

フライベルグ駅に朝8時に全員集合。動態保存DBのSL(D型)で1時間かけケムニッツミット駅まで保存鉄道旅行する。ここまでは好評だったが、保存車両車庫や機械工場視察がなく多少期待外れであった(2000年の11回ロンドン会議ではこの鉄道工場視察は人気があった)。駅からIMCまで徒歩で行き、経済格差下不況倒産の東独時代使用巨大レンガ工場崩壊保存現場を見る。IMCでは、館長歓迎挨拶のあと、ホフマン=アクテテム、ウエセラール氏の基調講演があった。ケムニッツ工業史は概観のみ、ケムニッツ都市再開発中心で多少失望した。その後、館内見学を行なったが、動態展示の繊維機械、機械工業の充実以外、東西格差経済不況を反映し、残念ながらこの博物館は理工系館にありがちな、展示品の古さと最新科学技術展示不足、科学原理コーナーも少なく、旧式化したデッドミュージアム状態であった。

今回は学会対応に全点稼働で準備したが、普段は運営費不足の止まった展示品も多いという。ミュージアムショップもあまり充実していない。しかし、2005年のヨーロッパ博物館賞を得ており、ケムニッツ工業史は繊維機械中心に世界的に知られており、旧西ドイツ地区の公的資金を努力して導入し、名実ともにドイツの国立工業博物館としての今後の再生と発展が期待された。

次いで建築史中心のバスガイドツアー(英語)となり、登録時配布されたガイドテキストに沿って、著名なケムニッツの以下5か所の現存修復繊維、機械工場建物を視察した。機械遺産のない建築遺産のみのツアーであったが、機械工業史は垣間見ることが出来た。

- ① 旧ベルンハルト紡績工場(1798年、現在は高齢者向け高級MS):ドイツ最古の繊維工場で、サクソンの繊維工業史の貴重な遺産建物群。旧繊維工場建物の3つの5階建て工場、4階建て事務所建物の殆どが復元現存。入口右手の工場1階にドイツ繊維工業史展示がある。現内部は医療施設の充実した高齢者向け高級マンションである。使用して歴史的建造物保

存の典型例である。周辺は 1800 年代の古い当時工場建物が倉庫利用で現存し、歴史保存地区としての今後の整備が期待される。

- ② 旧モリッツ・サミュエル・エッシェ靴下製造機械工場 (1870 年、現ヘルスセンター)：メインビルの赤黄レンガで装飾の外壁、高さ 22 m の高塔が教会型で復元再現。ケムニッツ市内で立つ美しい建物である。
- ③ 旧シェーンヘル繊維工場 (1799 年、現産業商業地区)：4 階建て工場、時計塔のある中央建物が復元再現され、現商業、レジャー、文化の多目的ホールになっている。
- ④ 旧シューベルト・ザルツァー編み物機械製造工場 (1883 年、現商業公園)：63m の高塔を持つ建物を復元再現。工場が解体された、ブラウンフィールド (高汚染未使用空地) は 4.5 万平米の区画で、被覆して商業的公園 (メセナ等の企業イベント会場) として利用されている。広場周辺に元建物が多少残る。
- ⑤ 旧ワンダラー自動車工場 (1885 年、現多目的ホール)：この会社は自動二輪車製造から始まり、タイプライター、繊維機械製造まで行なった。戦後は航空機エンジンも製造した。工員は 9300 人、高対爆性の巨大な建物面積は 23 万平米に達し、殆ど現存して修復保存され、現在はメセナ会場、文化、催事、貿易イベント会場として 15% が使用中である。裏手には大きな廃棄された工場建物群が続く。
- ⑥ サクソン刺繍機械製造工場 (1872 年、現行政管理下施設、博物館の公開予定)：5 の建物敷地の外れに孤立して現存するこの放置建物は、ドイツ唯一の現存木造工場 (外壁はレンガ) で、貴重な建築史産業遺産である。巨大であった刺繍機械工場群の一部 (最古) で、第一級建築記念物である。支柱が木製であるのは日本と同じで、当時は鉄骨より木組みがより強度が高かった。天井走行クレーンも木製。今後は整備して博物館公開予定である。夕方 18 時より、市長挨拶の歓迎パーティーとなり、

事後も SL でフライベルグに戻った。

□総括的考察

- ① このツアーで、旧東独の大規模で歴史ある代表的工業都市ケムニッツ市の実態が知れて充実したツアーだった。ただし、講演会、バスツアーは今日流行の建築史、都市計画に偏重しており、機械、交通、土木関係の多数参加者向けには、この都市における繊維、機械産業史に焦点化したものも考えられる。繊維機械遺産についても崩壊と現状、原因と対応などの問題 (遺産評価と売却等の経済問題) の解明の説明が必要である。
- ② IMC は残念にも視察すべき典型博物館と言えず、機械産業遺産史を見せるならば、送迎の SL の車庫と保存施設見学や現役の半導体等の工場見学、規模の大きい (学生 1 万人) の工業大学現状見学ツアーなどが参加者に期待されるものであった。
- ③ 戦後の東独時代の産業史の非展開の意味を、戦前・戦中史との比較で、もう少し掘り下げるべきであった。
- ④ 講演会ではケムニッツ繊維、機械工業史解明が期待されたが、歴史映像提示が非常に少なく、ケムニッツ産業史総合分析が不十分で分かりにくかったのは残念であった。ちなみに、建築史、都市計画史は充実しており、評価が高い。

(5) 総会

(9月5日)

学会最終日の午後 2 時からペーター通り校舎のアルテメンザ講堂で 100 人 (日本人 5 人) が参加して開催された。議事録署名人選出、メンデ氏追悼、カサネルズ会長挨拶と名誉会長就任、新会長選考があり、事務局提案で、P.マーチン氏 (アメリカ・ミシガン工科大社会学部教授、SIA 代表) が選出された。イギリス、ドイツが 37 年主導したヨーロッパ中心の TICCIH における真の国際化の実現に向けての最適人事である。

管財人選挙のあと、TICCIH と新興アジア企画のインドネシアー日本の建築家集団組織 mAAN との組織協定がされ、代表で禅野氏（東大生産研建築史）が英語で挨拶した。最後に国際会議予告として、ICOMOS 総会（2010 年オーストラリア）、ICOTEC 総会（2010 年フィンランド）が紹介され、スライドで開催国アピールがなされた。

最後に注目の TICCIH 次期開催国（第 15 回、2010 年）決定についてであったが、正式立候補がないことから結局未決で委員会預かりとなり、協議の上開催国を各国へ連絡となった。

この件に関しては、2002 年回国際科学技術教育会議 IOSTE を開催したブラジルとの下馬評や、フィンランドは関連した他の国際会議が続くこと、会場から開催地は非西欧の要望でアジアなら、インドネシアでの mAAN 総会が 2011 年にあり、リンク学会ではどうかとの禅野氏の提案があったが、3 年サイクルは変更不可で却下された。

なお、学会運営中心の 8 運営委員（各国、各地区代表）として、インド・台湾が選出されたが、日本が委員に選出されなかったのは、TICCIH の国際化の流れから見ても、内田、庄谷、種田氏と続いた 30 年からの参加履歴や 2005 年の名古屋中間会議を実施した経験を持つ日本が委員に選出されなかったことは残念である。ちなみに、種田氏は誰もが認める国際的最適人者であるといえる。アジアの学術指導国として責任と期待の高まる日本として、国際的飛躍の機会を逃がした誠に残念な選考結果であった。

(6) アトラクション (各日、夜)

この会議はヨーロッパ圏に共通のよく遊び、学芸伝統があり、多少堅いイメージのドイツ主催でも楽しみが多い国際学会であった。

8 月 30 日 シュロスでの鉱山都市民俗郷土芸能、コーラスとブラバン演奏

8 月 31 日 聖ニコライ教会での地元楽団によるモーツァルト、タンゴ（ダンス付）演奏

9 月 2 日 シュロスとアルテメンザでの映画会、1950 年代の炭鉱振興映画（白黒 1 時間）とドイツ産業遺産紹介映画（カラー 2 時間）

9 月 3 日 フライベルグ大聖堂でのパイプオルガンによるコンサート 2 時間、バッハほか 7 曲

9 月 4 日 ケムニッツ市 IMC でのジャズカンパニー、ケムニッツ・バンド演奏

9 月 5 日 フライベルグ新銀鉱山野外レストランでの古典的技術チャコール燃焼実験と閉会パーティー、主催者挨拶と記念品送呈、バンド演奏他の企画

この他、8 月 30 日には、市内歴史的建造物ガイドツアーがあり、マルクト、ラートハウス、メイン通り歴史的建物、銀経営者シルバーマン居宅他の歴史解説も含まれている。

4. 終わりに—今後の課題

TICCIH 第 14 回会議は産業考古学、国内での実証課題的産業考古学研究と国外での日本研究の発信を考えると、貴重な学会参加の場であった。

世界の研究潮流が主体の実践的課題を提案し、社会的にも価値ある学会機能が求められている現在、文献史学的で事実の羅列に近い日本の学会研究の動向は国際的に時代に遅れをとっており、こうした点からも学会体質の質的改善が求められている。

今回の国際会議ではその点の課題が浮き彫りにされた。産業考古学会の現国際委員会を強化発展させ、国際レベルで論理的にも言語的にも対抗できる学会水準に高めてゆく必要があると感じられた。

これまでの国内の TICCIH 参加者は自動的に TICCIH 会員となるのだが、その結束を固めるためにも、仮称「日本委員会」発足と実動、規約、組織、行事計画、予算決定、各省庁との交渉部門確立、国際会議招致と運営、が今求められている。なお、この点に関しては、種田明氏による準備が現在進行中であることを付記しておく。